

ただいま、ポリー!

追悼のページ



4年前の夏の日、芦屋動物愛護協会からマルチーズを預かることになりました。捨て犬で某動物管理センターに収容されたけれど引き取り手がなく、翌日には殺処分になる予定の犬とのことでした。一時預りの打診を受け「いいですよ」と気軽に答え、白くてフワフワした可愛いマルチーズの到着を楽しみに待っていました。

ところが事前にアトピー性皮膚炎があると聞いてはいたものの、連れて来られた犬を見たとき驚きといたら……。汚れた毛をバリカンでカットされたその犬には、純白の美しい毛並みなんてありません。全身がひどく痒いようで、掻き過ぎた身体の一部は禿げて象の皮膚のようです。目は充血して痩せていてヨタヨタしているし、お腹に多くの乳腺腫瘍があったのです。「殺処分される犬猫の命を救いたい!」と思っていた気持ちは揺れ、満身創痍の犬を預かることに不安で一杯になりました。

ただこの年齢不明の老犬にも良いところがありました。身体は結構、おなかに食欲があるのです。「この子は生きようとしている!」そう思い、ポリーという名前をつけて何度も名前を呼ぶうちに、この子の面倒をみようという小さな覚悟がようやく私の中に芽生えてきたのです。獣医からアレルギーの指導を受けてシャンプーを繰り返し、アレルギーを避けた食事を与えると皮膚の状態も半年ほどで改善し、やがて、お散歩中に「かわいい!」と声をかけてもらえるほどになりました。

皮膚の状態がよくなると、乳腺腫瘍の部分切除、子宮水種、鼻血の処置など緊急手術を何度も受けることになりました。でもポリーはその度に命の危険を乗り越えて、家に戻ると「夕食ちょうだい!」と元気に要求吠えをします。それで私達はいつしか「不死身のポリー」と呼ぶようになっていました。

そんなポリーとは何度も旅行にいきました。「さんふらわあ」でキャビンと一緒に泊まり、別府港から車で鹿児島島の102歳の祖母に会いにも行きました。犬好きの祖母はポリーを膝に乗せ、自分の犬のようになでながら私達と話をすることが出来て、ポリーとの良い思い出のひとつになりました。

いつしか夜は私に身体をくっつけて眠るようになり、私が夜更かしているとき、階段を上り二階の私の布団で枕を使って先に寝ています。こうして、ポリーはいつの間にか私達の家族となっていました。

宇都 寿江

この春先に突然呼吸が苦しくなったポリーは、乳腺腫瘍が肺に転移しての呼吸困難と診断されました。「元の飼い主が早期に避妊手術さえしていたら……」と悔やまれてなりません。(避妊手術で乳腺腫瘍になる確率が下がるのです!) 動物病院の酸素室に入院したポリーを、毎晩見舞いに行く日々が続きました。

でも、不死身のポリーは数日後にはまた元気に復活して退院。そんな風にして、しばらく発作と回復を繰り返す日々が続きました。いよいよポリーが危ない!と病院から連絡があったのは今年5月14日の朝。勤務中だった私に代わり、主人がかけつけました。酸素ボンベのチューブを口にいられたポリーの心臓は止まってしまう、先生が蘇生処置をし始めた時にちょうど主人が到着しました。ウチの人の「ポリー!」という聞き覚えのある声がポリーに届いたのでしょうか。一度止まった心臓がその時再び動き始めたそうです。驚いた先生は「奇跡だ!」と言われ、そのまま蘇生処置を続けようと言われました。けれども主人は「持ち直してもあと一日」という先生の言葉を聞いてポリーの方に向きなおし、身体をなでながらこう言ったそうです。

「ポリー、もういいよ。もういいよ。」

するとそれがポリーの返事だともいうように、心電図のモニターの鼓動を示す曲線が、スーッとまっすぐな線になり、それが不死身のポリーの最期でした。

犬や猫はいなくなっても気配を残すものですね。またポリーは二階にいて、勝手にお布団で寝ているようです。肉を焼くとその匂いで起きだして、階段の上からこちらを覗き込んでいる気がします。外でマルチーズをみかけると「あ、ポリー!生きてたの!?!」と思います。飼育放棄された犬のニュースが流れると、ポリーのことを思い出します。

我が家でポリーは、姿は見えないけれどもなんとなくそばにいる、そんな存在になりました。だから今でも時々名前を呼んでいます。「ただいま、ポリー!」



Polly